

症例からみる診療のポイント

Case.1 | 減薬と毛質の改善に成功した慢性・重症型犬アトピー性皮膚炎(CAD)の症例

プロフィール

柴犬 9歳 雌

診断

CADに伴う皮膚炎および外耳炎

ポイント

 オクラシチニブおよび外用ステロイド剤の減薬
 皮膚炎および外耳炎の症状改善
 毛質の著しい改善

症例経過

症例背景

2歳齢発症、柴犬のCADの症例で、通年性、慢性再発性の痒痒と皮膚炎を呈していた。

オクラシチニブ、ロキベトマブ、外用ステロイド、必須脂肪酸、抗菌成分配合シャンプーなどで加療されるも、年々悪化傾向にあった。また、過去に実施した除去食試験(アミノペプチドフォーミュラ小型犬用、ロイヤルカナンジャポン)を実施したものの反応は得られなかったため、皮膚強化食(セレクトスキンケア、ロイヤルカナンジャポン)を給与していた。

初診時～診断

当院初診時には、腋窩および腹部を中心とした重度の紅斑、苔癬化、色素沈着と、肢端の裂毛を認めた(図1~3)。また、両側性に垂直耳道の浮腫と耳垢過多を伴っていた。皮表細胞診において酵母様真菌の増殖、グラム陽性球菌および好中球を認めた。その他の皮膚科学的検査で、外部寄生虫や皮膚糸状菌は否定された。

本症例を皮膚の構造変化、皮表ディスバイオーシス、外耳炎を伴う、環境アレルゲン誘発性、重症型CADと診断した。

初診時



(図1)



(図2)



(図3)

投薬治療

初期治療として、プレドニゾロン(0.9 mg/kg, 1日1回)および外用ステロイド剤(皮膚および点耳薬)で加療した結果、皮膚の構造変化は大きく改善し、良好な治療反応経過を辿った。

その後、プレドニゾロンの全身投与からオクラシチニブ(0.6 mg/kg, 1日1~2回)へ切り替えたところ、全体的な痒みの管理は良好ではあったが、皮膚炎や耳炎の管理のために、外用ステロイド剤の継続的な使用は必要であった(図4, 5)。

投薬治療後



(図4)



(図5)

食事療法

●スキントピック給与期間:2ヶ月

さらなる症状の改善と減薬を目的として、スキントピックの給与を行った。その結果、給与1ヶ月後にオクラシチニブは隔日投与に減薬でき、給与2ヶ月後には**3日に1回の投与で症状は管理され、毛質の著しい改善**を認めた(図6, 7)。また、外用ステロイド剤においても、スキントピック給与2ヶ月後に週に1~2回の使用までの減薬に成功した。

食事療法後



(図6)



(図7)

ペットオーナーの反応

毛質の改善が顕著だったこと、外用ステロイド剤の使用頻度が減少することで治療の負担が軽減したことが好印象でした。



本症例の担当医 植山先生による考察

本症例では療法食の給与により、痒みや皮膚炎に加えて耳症状においても再燃防止と減薬に成功しました。CADは必要最低限の薬で、症状が再燃しない状態を維持することが治療戦略上重要であるため、療法食はCADの維持管理フェーズにおいて有用性が高いと考えます。

植山 晃先生 サークス動物病院・アジア獣医皮膚科専門医協会レジデント [指導医:伊従 慶太先生]